

## 二、丹那トンネルの名は

鐵道線路に出来る橋や、トンネルに付ける名前は、一番最初に線路の形を決める測量の者が、名付親になるのが普通です。測量は、自然の山や河をにらめながら、茲にトンネルを掘らう、茲は掘割でいゝ、此河は茲に橋を架けようとか、出来上つた線路の形を頭の裡に描きながら、距離を測り、高低を定めて行くのが仕事です。今迄機關車もろくに見たことのない、昔乍らの田舎に出掛けて、元氣のいゝ若者共が、山野を飛び廻りながら、かう謂ふ仕事をやつて行くのですから、測量と謂ふことは、土木技術者に取つては、とても樂しみな仕事の一つなのです。自然測量には色々面白い思出の種が出来ます。ですから自分が決めて行く橋や、トンネルの名前にも、おのづと、思出となる様な名前を付けることがあります。

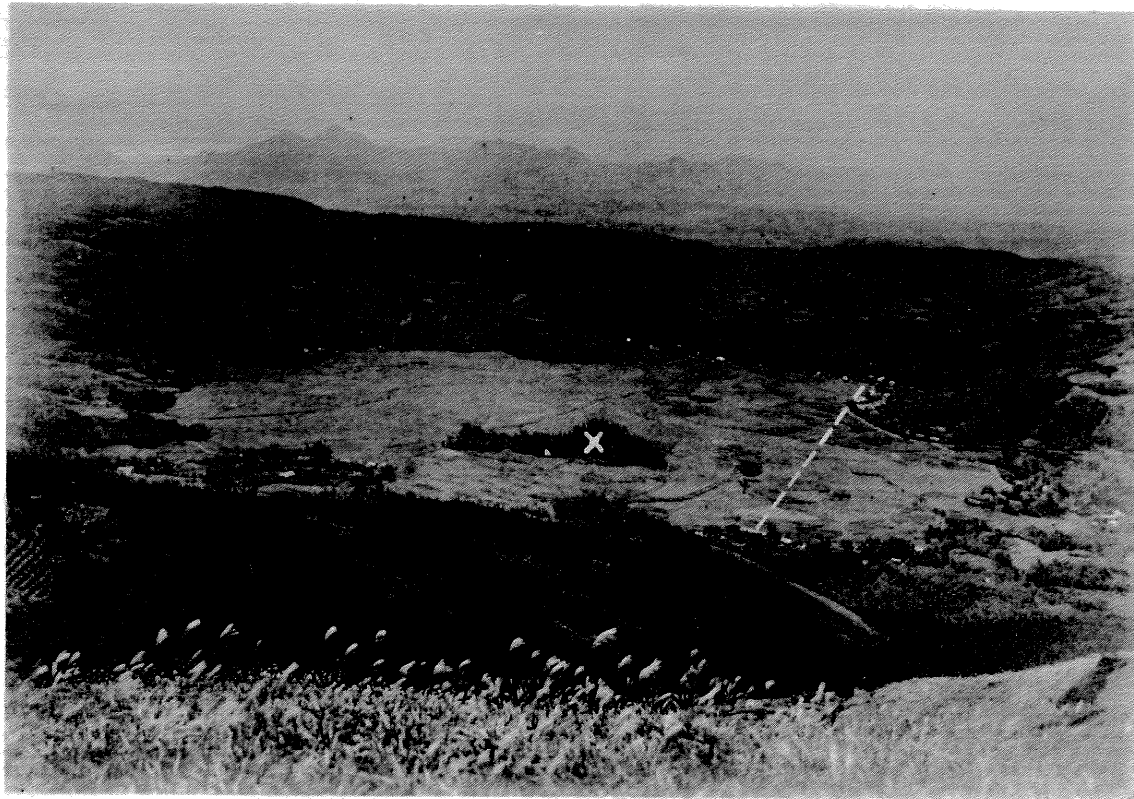
「丹那トンネル」之れは呼びなれたせゐか、とてもいゝ名前の様な氣がします。併し初めは「丹那山トンネル」と謂つたのです。恐らく丹那盆地の眞下を通るから、かうつけたのだらうと想像もつきませんが、これには測量時代に因縁話があるのです。

今でこそ丹那トンネルが抜けて居る熱海峠には、立派な縣道も出来て、自動車も自由に通ひ、丹那盆地にも自動車で降りられると謂ふ始末で、通る人も繁く、とても便利になりましたが、こんなことは、二十餘年前の測量時代には、思ひもよらなかつたことです。當時トンネルが抜けて居る山の上には、二三の部落がある外は、炭焼く小屋

の一二二つがあつた許りで、熱海から三島に出る峠越も、歩いて通れるだけの山道でした。従つて、此の邊は丹那部落邊の人が農産物を賣りに熱海に通ふ外は三島方面から熱海に湯治に行く人が、たまに通る位なもので、今から見ると、誠に寂しいものでした。

こんな不便な土地柄へ乗り込んだ當時の測量隊ですから、第一に泊る宿が心配でした。熱海や三島から通つたのでは仕事になりません。そこで、當時三島に居た田方郡長さん(當時はまだ郡制がしかれて居りました)の世話で、丹那盆地の名主川口秋助さんの家に泊めて貰ふことになりました。丹那盆地は丁度トンネルの真中で、しかも眞上に當りますが、盆地を圍む山裾に部落が百戸許りあり、平坦部の中央即ち盆地の眞中邊に、こんもり茂つた小山があつて、そこに一つ離れて名主川口さんの大きな邸宅があります。

川口さんの家は盆地第一の名家で、當主の秋助さん——此の方は本年春物故されましたが——は當時早大出の新人でした。土地唯一の識者と謂ふ譯で、鐵道にも理解があり、測量隊を心から歡待して呉れました。なんでも、川口さんの家の先代には、土地の農民の犠牲となつて、幕府に直訴し處刑された方もあるとかで、盆地部落の人々からは、特別な敬意と信頼とを受けて居りました。川口さんが、そんな風でありましたから、土地の人達も自然と測量隊に好意を示した譯で、測量の仕事も氣持よく運んだのです。思ひがけない土地で、思ひがけない好意を受けたのですから、測量隊が心から感謝したのも無理はありません。それに、茲に來る迄に泊つて居つた熱海で、冷遇を受けたせいもあつたのです。測量隊は大勢の工夫や人夫を引連れ、亂暴な出立で、朝は早くから、夜は内業で遅く



瀧地山より丹那盆地を望む。トンネルは点線で示した地下約五百呎の所を通つて居る。×印は川口氏邸のある森。

迄働くのですから、紳士淑女相手の熱海温泉等で、いゝ顔して泊めて呉れないのも無理はありません。

こんな工合で、丹那トンネルの測量を無事に終る迄、ずつと川口さんの宅に厄介になつた譯ですが、此の間に於ける測量隊一同の川口さんに對する感謝の念は、自然と何か之れを記念したい気分になりました。それで思ひつゝたのが、此の測量した大トンネルに川口さんの部落の名前「丹那」をつけようと謂ふ考へです。トンネルも丁度其の眞下を通つてゐることだし、それが良いと決つたのです。ところがトンネルの名前には大抵、何々山トンネルと、山がついてますから、「丹那トンネル」では、どうも物足りない、それぢや山をつけてやらうと謂ふ譯で、測量隊は之れを「丹那山トンネル」と命名したのです。

こんな氣持で測量隊がつけた名前が、別に問題にもならず、當時其儘採用されたのですが、後年、青木勇技師が熱海線建設事務所長となられた時、一體丹那山トンネルといふけれど、丹那山と云ふ山はどこにあるのか、トンネルの通つてゐる山は瀧地山と云ふ山ではないか、と云ふ議論が起りました。御尤もな話で、丹那山と云ふ山は地圖の上にもどこにもありません。無い山の名をつけて置くのも變なものだと云ふ譯で、たうとう改めて「丹那山トンネル」の山をとつて、たゞ「丹那トンネル」と呼ぶ事にしました。「丹那トンネル」「丹那トンネル」呼んでみるとなかなか語呂が良い様です。「タンナ」の「ン」と「トンネル」の「ン」とが一寸韻をふくんだ様なわけになります。これを「丹那山トンネル」とすると「サン」の「ン」が又一つ増して、反つてくどくなる様です。「山」を抜いたのはよかつたと思ひます。

世間では丹那トンネルがなかなか抜けないうで中止しろの、放棄しろのと、一時喧しいことがありましたが、實は丹那トンネルの「山」は大正十一年すでに青木所長の時に抜かれてゐたのであります。